　2020年代初頭、ネットランナーは操作不可能なテロリスト予備軍のようなものだった。コーポによる彼らの扱いはそれで、彼らが起こすコラテラル・ダメージ、そしてコーポに対する影響の大きさから、ランナーを雇って書かせたICEを使ってランナーを捕らえ、彼らを鉛玉としてデータに突っ込ませるような運用がしばしば為された。それでさえ頻繁にを食らった———死に直面し、反抗を決めたネットランナーによる捨て身の攻撃は、コーポの人材と資源をビリオン単位で損ない、ネットランナーによって繰り返されるプログラムとAIの軍拡競争は、ただコラテラル・ダメージを拡大する方向にのみ終始していた。

　このサイバースペースの魔術師たちは一般にオープンソースを尊び、無限の進化に追従し、死のうともローグAIと化してネットの海に潜伏することによって、半永久の命を得ていた。事態が変じ始めたのは2020年代後半の事だ。人材を集め、徹底的な教育と教化を施したランナーのを作る…

　カンザキが始めた計画はすぐに他のメガコーポの追従の対象となり、ランナーの主流はからコーポのへ移って行った。今やネットは傭兵ランナーによるではなく、コーポ同士のよりとなったのである。

　そしてこの矢面に立つランナーのを育成するカンザキの組織が、世界各地のが保有するであった。

　閉鎖教育施設の基本方針は徹底した飴と鞭。異常な量の仮想訓練、週6日1日18時間にもわたるディープダイヴと徹底的なコーディングの詰め込みを5年に渡って継続する促成教育は、脱落者の多さで知られる一方、パスした卒業生の中に、に対する依存的妄執、そして世界全体で活躍する機会を与えてくれる企業に対する熱烈な忠誠心を植え付けることができる、効率的なシステムとして鳴らしていた。あまりに成果が大きかったため、この教育課程自体が特級の企業秘密となるほどだった。

　そんな促成教育課程を突破した私、・・にとってみれば、その後に続くNA近郊にあるアカデミーでの最上位ネットランニングコースなんていうのは、キャリア隠蔽のために築かれたほとんど意味のないモラトリアムに過ぎなかった。講義や研究の内容は実用的ではあったが、5年間の促成教育課程と比べれば、で、寧ろ退屈なくらいだった。

　クラスの人数は20人。NAには西半球と大西洋を跨いだヨーロッパ全体から閉鎖教育施設の卒業生が集まってくるため、学生の相貌は多彩で、コイサン族出身の奴も居れば、ガイアナ出身で黒人・インディオ・インド系の全ての血が混ざりまくった混血児も居た。

　そんな中に居ては、純粋なヨーロッパ系やアジア・ヨーロッパの混血くらいになると、むしろ逆に浮いて見えたものだ。

　そうした一人が成績トップのアステリア・ヴィッカースだった。純ヨーロッパ系、恐らくゲルマンとスラヴの混血。ヨーロッパの閉鎖教育施設出身で、珍しく歪んだことを言わず、カンザキの掲げる理想の社員を体現するかの如く、率先力を発揮して仕切ったり、5徹してコーディングしているから欠席している奴の仮病をわざわざ信じ込んでやったりと、やたらに気を利かせて振舞っていた。

　私は正直、こんなのはで少しでも優位に立つための偽装に過ぎないと思っていた。他の連中もそう考えていただろう。圧倒的な成績で、研究内容もかなりチャレンジングだったから、そんなモードにしがみつかなくたっての先頭を走れるのは間違いないだろうに、そこまでして地位が欲しいのかと、若干反感を覚えないでもなかった。

　この持たざる者の嫉妬に近い感情を拗らせた連中からはアステリアは逆恨みされていた。一応同じ企業に所属する仲間だが、なんかに配属されてしまえば、もう蹴落としあうライヴァル同士。それを前提にした関係の中で、とりわけ上昇志向が強く見られていたアステリアは、キャリア上の大きな障害物として捉えられていたのだ。

　そんなアステリアが恐らく一番親しかったのが、これまた人種的に浮くカテゴリに属していたロイド・中浜だった。ファミリーネームからわかる通り日系だが、相当血が薄いのか外見はほぼ完全にラテンとアングロサクソンの混血。

　こちらはコネで入ったのではという噂が立っていたせいで、より強く浮いていた。アステリアと似て講義にきっちり出席し、研究も程よくやっている優等生っぽい奴だが、たまによくわからない理由でネットミームを作ったり、やたら複雑なアルゴリズムを書いたり、を改造して更に理解し難くしたりしていたので、アステリアより親しみやすい外面だった。

　しかし、ロイドの経歴を鑑みると、異常性が際立って近付く気が失せる。奴は閉鎖教育施設出身ではないのだ。

　確かに、外面として公平な教育組織を偽装するため、カンザキ・アカデミーのネットランニングクラスにも、他の下位クラスから入れることになっていた。だが、そんなものは実現した例など存在しない本当にただの偽装のための形骸システムだと皆思っていたのだ。

　それを実現したのがロイドだった。どうやら親が署員らしく、署員特権の一つ、子供の少人数コースへの入学を利用してカンザキ・アカデミーに入ってきた。最初はもっと下位の、ネットランニングクラスに居たが、ド級の成績を叩き出した上に高完成度の個人論文を提出してクラス転属を繰り返し、入学3ヵ月にして不可能と思われたネットランニングクラス転属を成功させたのだ。

　最初、その実力を確かめようと模擬的なクラックリーグでロイドを集中攻撃した全員が舌を巻いた。ロイドは個人で強力なICEをいくつも保有し、そいつらをごく短時間で最適化しながらこちらのアクセスを徹底的に阻止し続けた。

　OSの脆弱性を用いた攻撃も通らないロイドに、思いつく限りのプログラムサブルーティンを用いて攻撃を仕掛けたが、ロイドは仕掛けられたサブルーティンを全て吸収し、ニューラルネットワークと遺伝アルゴリズムを使ったAIシステムでもって総反撃を仕掛け、対応の遅れた攻撃側の60%を即座にフライした。

　このまま無双が続くかと思われたとき、それまで一切アクションを取っていなかったアステリアがロイドにアタックを仕掛け、ロイドは呆れ返るほどあっさりと敗れた。その後は消化試合で、あっけにとられた私たちを、ロイドのAIを模倣したアステリアが全員フライして終わったのだ。

　それ以降のリーグや、研究の披瀝でもロイドはアステリアと競り合って上位2位内に君臨した。促成教育を受けていない天然の化物———とんでもないダークホースだ。私たちは、彼のことを、促成課程卒業生が慢心しないように叩きのめすため、カンザキ上層部が送り込んできた刺客だと仮定することにした。

　だからなのだろうか。あの謎の空間で説明を受けたとき、際立っていたのはやはり上述の二人だった。

　アステリアはなぜか召喚側に回っていた。召喚者であるらしい、磔にされていた人物は彼女の相貌をしていた。そして、困惑する暇もなく、更なる情報を流し込まれる私達の中で、ロイドが最初に正気に戻り、何か騒ぎ立てた。有無を言わさぬ情報のインフローの中で、彼の騒ぎ立てる声を聴いた私たちは徐々に強制的理解から目覚め、困惑する余裕を「持てた」。もしあの強制理解を強いられるモードで転移していたら、不味い事態に発展していたかもしれない。そう考えると、多少感謝しても良いのだろうか。

　しかし、彼が騒ぎ立て始めたときに始まった説明を、彼は聴けていたのだろうか気になる。何しろ、この説明がもしかすると最も重要かもしれなかったのだ…

————————————————————————————————————

　『先ほど映った召喚者を代表とするメリディアルの神経膠の最大目的は、いずれ世界を統べるを生み出すこと。「彼女ら」は、PAB操作能力に秀でた者達の遺伝子を回収し、かけ合わせることでこれが実現可能であるとしている。』

　家畜の選択交配の人間版。より優れた形質を持った個体の遺伝子を集め、子供にPAB操作能力の向上因子を濃縮して伝えていくことにより、最終的にに辿り着くというロジック。そして彼女らはPAB操作の拡張により、子供に受け継がれる遺伝子すらもコントロールする術を得ていた。

　『神経膠は現在大きく二つの派閥に分裂している。転移者の遺伝子すらも取り込もうとする派と、現地人の遺伝のみから救世主は導出可能であるとする派。これらにデザイナーズベイビーや突然変異に対するスタンスの違いが絡み合い、神経膠の内部は複雑な様相を呈している。あなた達の保護者はアストラント派となるが、注意が必要———私が解説に時間をかけたことによって、アストラント派は今波での救世主の到来を期待している。』

　PAB操作遺伝はX染色体やホルモンバランスに強く結びついている。一般に、女子の方が親のPAB操作能力形質を正確に受け継ぎ易い———この理由により、神経膠の構成員は基本的に女性であり、女子を産むのが普通である。

　このために、基本的に父系の遺伝は、神経膠外の遺伝プールから自然に生まれ出てくる強力な能力者達にその源が固定される。アストラント派は、転移者に救世主に繋がる父系遺伝源となる者を求めているのだ。

　そして、この状況で転移の実行者が特別扱いした転移者が出現したとなればどうなるか。当然、父系遺伝源が転移者内に存在することが期待される。

　『つまり、神経膠で保護される状況に留まれば、待っているのは種馬生活、あるいはその女性版。この状況を拒否するなら、別の道もある。今波以前の37回の転移の中で、神経膠から脱出した者達も多く居る。彼らは転移者の保護を目的とした組織を作り、「」に本拠地を置き、地球文明の類似社会を発達させた。』

　転移先の世界の太陽系は元の世界のものとは少し異なる。地球のL3に生命居住可能な別の地球型惑星が存在するのである。

　それが「逆」。元々、人間社会を支配する結社である神経膠に逆らった者たちが集まる掃き溜めであった「逆」は、今や転移者中心の社会が築かれ、地球に似た社会システムを構築しつつある。

　『この転移者保護組織の名は「」。転移した元ヤクザや日系コーポが中心となった組織で、「逆」の支援を受けながら、神経膠の支配する地球および残骸の道の地球側支配地域で諜報活動や神経膠からの脱出の手引きを行っている。』

　ではこの錆鷲に従えばいいのではないか。しかし、そう簡単な話ではないようである。

　『地球に類似した社会のため、「逆」では企業による独占と対立が蔓延り、転移者も必然的にとして使われる立場にある。特に、PAB能力を持つ者は新ネットに接続するインターフェースとして利用できるため、「逆」においては、地上で諜報や破壊工作を行うエージェントとしての扱いを受けることが多い。また、必然的に神経膠からの脱出は犠牲者を伴う。』

　つまりそういうことだ。PABネット接続可能な能力を持つ人間は転移者の中では割合最近登場した人種であり、逆ではこの類の人材は絶対的な不足状態にある。このような中での優先任務は、有無を言わさない敵地での命がけの諜報活動なのである。

　加えて神経膠はトップクラスのPAB能力を持つ者達、即ち上級魔術師の集団であるから、太刀打ちできない程度のPAB能力練度しか持たない転移者たちでは、手引きがあろうと犠牲は免れ得ないのだ。

　『どちらに着くか選択するのはあなた達次第。どちらからも逃げ出して活動してもいいけど、秘密を握ったものの逃走は、どちらの組織も許さない。熟慮の上で決定することを推奨する。』

　そう言ってついに一方的な説明が終了した。ロイドが徐々に薄くさせていた強制理解の霧が完全に晴れ、意識が能動形態に復帰していく。勿論、流し込まれた知識を理解はしても、納得は全然できなかった。

　先ほどまで騒いでいたロイドは沈黙している。飲み込まされた事実に呻く声だけが響く。私たちは、ずっとその上を進んでいたを外れ、どこを向いても道具としてこちらを使い捨てようとする人間しかいない地獄にこれから放り込まれるのだ。

　そして空間が歪み始めた。転移が遂に始まる。意味はないと知りながら身構える。転移した先で最初に対面するのはきっと、先ほど見たアステリアの容貌をした召喚者なのだろう。あの召喚者に関する説明は一切なかった。きっとロイドが騒いでいたのはそのことなのだろうが…

　これから起こりそうなことを考えると、自殺したくなるくらいに憂鬱だった。ああ、神なんて信じたことはなかったけど、居るなら言ってください、こんなの全部ただのなのだと。

　白い光。オプティクスの感光部が焼き付きそうなほどの光。ようやくそれが薄れてきたとき、私はそれがどうやら、部屋のあらゆる部分を覆う幾何学模様からの光らしいことを知った。

　「！様！御無事ですか！」

　溌溂とした声に、悲鳴に近い痛ましいまでの不安と同情を孕んだ叫び。若い女声が室内に反響する。

　「」と呼ばれた、目の前の白金衣のは壁に寄りかかり、指が細長い美しい手で両瞼を覆い、荒い息を立てていた。

　手指の隙間から赤黒い血が滴っている。頬を流れ落ちた血は白金衣に触れると、瞬間シアンに「燃え上って」中空に消えた。

　肩を上下させて息をしていたアステリアの見た目をした女性が手を瞼の上に翳したまま口を開いた。

　「これは…何です？何が？その…ええと、目を閉ざしたまま話して申し訳ないですが、ここは何処ですか？」

　澄んだコントラルト。できるだけ丁寧に聞こえるように配慮しているらしい声は震え、隠しきれない怯えが滲んでいた。

　「は…？」

　ここで最初の叫びの主の後ろ姿が視界に入った。波打つ黒髪に、高い身長。灰色っぽい肌の上に、召喚者と似た白い法衣を着ている。装飾は金ではなく銀と黒だった。

　「ナースチャ！を呼んできて！聖女様を連れ出す！」

　後ろでぺちぺちと素足で走る音が始まり、遠ざかって消えていった。

　「何が？」「私は何？」を繰り返す召喚者は叫びの主に付き添われ、困惑しながら視界から外れていった。

　つい先ほどまで目の前で繰り広げられていた寸劇に意識を囚われて状況を確認していなかった。周囲を見回し、何が起きているか認識する。

　私と共に転移してきたクラスメートたちは、横6、縦3の行列を作って並んでいた。皆膝立ちで、恐らく転移前に着ていたであろうランナースーツやジャケットなどを身に着けている。

　私と同じく寸劇が終わってようやく周りを確認することに思い当たったのか、その多くが周囲を見回し、訝しげだったり、苛立っていたり、あるいは謎の展開に泣きそうになって居たりする顔で、状況を把握しようと努めていた。

　私は声を出そうとした。出せない。何かがのどにつっかえてるみたいに、声帯が上手く動かせず、呻き声すら出ない。膝立ちになっているところから立ち上がろうとしたが、脹脛が押さえつけられているように動かず、バランスを崩しかけた。

　そうこうしているうちに再び背後から素足が床をうつ音が聞こえてきて、先ほど叫んでいた黒髪の女が私たちの行列の前、先ほど召喚者が居た場所に出てきた。

　「お見苦しいところを。大脳梁様は遇にあのようになられるのです。

　さて、皆様には私共の召喚に応じて転移していただきました。私は・、他二名とともに皆様のこの施設での御世話を担当させていただきます。」

　そう言って黒髪の女が一礼する。コーポの礼法に忠実な、どこまでも優雅で落ち着き払った一例。先程の取り乱しようからは想像もできなかった。

　やたら長い礼を終え、女が顔を上げる。顔は美しく、アーモンド形の深緑の眼は気が強そうに若干眦が上がっており、彫りの深い顔立ちと若干厚い唇が見事なバランスで調和していて、2010年代に好まれたLAの女優を思わせた。

　しかしその礼法も、女性である私には美しいと感じられても魅了されるまではいかないし、話の内容が既にぶれた輪郭の存在に説明されたことの繰り返しだったものだから、正直拍子抜けしてしまった。

　異世界の宗教団体に召喚されたと来て身構えていたのだが、どうも私たちがどこまで説明されたか把握していないのかもしれない。

　「姿勢を固定させてしまっている御無礼を御許しください。被召喚者の方々には、我々の召喚に応じていただいているのですが、急なことですので、少々慌てる方が出てしまうことが常でして。」

　説明を続ける。同意の上での召喚のような言い方をしているが、私達は全然同意などしていない。そもそも私の場合、3徹の眠気が来て寝落ちして醒めたらあの空間に居たのだ。

　「皆様、落ち着かれているようですので、姿勢の固定は解除いたします。倒れられては大変ですので、上体を支えさせていただきます。慣れない感覚かと思いますが、危険なものではございませんので、身体を御任せください。」

　セレーナがそう言った途端、脹脛の固定が解除される。その場の面々の大半は身構えていたので身動ぎすることなく膝立ちを維持した。バランスを崩しかけた一部も、何か見えない障壁に支えられているような具合で上半身の傾きが固定される。

　これはの一種、恐らく念動だろう。説明された内容を考えると、18人に一気に加えるのはかなり難しそうに思えるのだが、流石に熟練した魔術師ということなのだろうか。

　魔術をかけている主は一切不明だったが、この組織の異常性は十分に理解できた。

　「この念動はと呼ばれる技術体系の一つでして、皆様には転移の際に特典として魔術の才が備わっておられます。私共はこれより、差し出がましい願いながら、皆様の魔術の才の披瀝を賜りたいと考えております。」

　やはり、転移時に私達が何を聞かされたかは判然としていないらしい。もしかすると、神経膠側の無知を利用して、この組織からの脱出、あるいは地位の保証が可能かもしれない…膝立ちから立ち上がりながら、私の脳が答えを求めて高周波数で稼働し始める中、寝耳に水の言葉が耳朶を打った。

　「では皆様、まずは簡単な知識確認から行いましょう。声帯を一人ずつ解放いたしますので、私の質問に口頭でお答えください。では、早速前列向かって右の方から。」

　不味い…これでは認識の差を利用できるという読みが覆る。

　セレーナが不自然なほど音を伴わずに、最初の受験者の前に移動した。恐らくだが魔術の一種———ディスプレイの意図を持った行動。知識確認をする旨が伝達された瞬間から場のは一変し、圧迫感がただの一人の女性でしかないはずの目の前の人物から溢れ出てくる。

　私は最前列、左から7番目。できるだけこちらの優位を保証できるように立ち回らなくてはならない———まずはセレーナとあの受験者の遣り取りを観察する。

　「」

　のような一言によって、最初の受験者———コートジボワール出身の・が魔術を解除される。彼は狼狽えたバリトンで、

　「質問と言われても…我々はそもそも何がなんだか…」

　と初めから質問にまともに答えない手に出た。

　「しかし、質問の対象となる知識は述べた通りでしょう？呑み込めなかったのであればもう一度伝えて差し上げましょうか？」

　「それには及びません…が、それより先に聞きたいことが大量にあるのです。質問に質問で返して恐縮なのですが、ここはそもそもどこなのでしょうか？」

　「彼の外なる神が、贈物たる貴方方にこの世界を動かすについて知識を与えなさらなかったということより、転移後に置かれる状況について貴方方が把握しなかったということの方が私には不思議に感じられますね。それではお答えしましょう、我々はです。よってここは組織の中枢神経系となります。

　———奇遇ながら、皆様には極めて身近な細胞名と存じますが。」

　セレーナが腰を曲げ、首をひねってダンカランの顎の下を覗き込む。長身の彼女が、大して背の高くないダンカランに下から覗き込むその構図は異常に淫猥に見え、何故か二者による逢瀬をすら思わせた。

　それより、質問内容だ。…！相手方はどうやらPABの正体を把握しているらしい。見たこともない建築様式や魔術から、侮れない文明を持った相手かと思っていたが、やはりそうらしい。少なくとも19世紀後半以上の科学認識は備えている…?

　私が推論を進めている一方で、彼女はそれ以上質問することなく次の受験者へ移って行った。目立っていたのは、今度は本気で狼狽えた状態で残されたダンカランの、彼女の移動への反応だ。まるで長年連れ添った女が寝取られたみたいな———怒りと憎悪すら感じさせるような顔。この短時間でどうすればそれほどの激情を植え付けられるというのだろうか…？

　「…

　、あるいはという言葉はどちらかと言いますと精神的意味合いが強い

———ベルを鳴らすと涎を流す犬のような神経回路です。こういった単純反射は

———に残ると思いますか？」

　それ以降の解答者たちの質問への応答は散々だった。散々というのは、質問に答えられなかったわけではない。答えられてはいたし、どうにかできる限り情報を隠蔽しようとしたのだが、セレーナ側の正鵠を射る鎌かけや、動揺を誘発するような質問の数々によって、転移時に何を教えられたのかを浮き彫りにされていったのである。

　しらばっくれたり、そもそも状況に対応できなくてうろたえているように見せかけても無駄だった。あの魔女は、わずかな動揺の仕方の変化によってすら何か情報を推測して引き出せるらしく、それを見せつけるかの如く、質問内容をより深く、正確にしていったのだ。私の番は来ることすらなかった。もうこれで十分とばかりに、最初の数人でセレーナは質問を切り上げてしまったのだ。

　「概ね皆様の魔術の知識の量は把握できました。御協力していただきありがとうございます。転移時に皆様が手に入れられた知識は全員同一であるものと愚考いたします。クオリアによる解釈の違いが存在するかもしれませんが、この知識量ならば実力を試すには十分でございます。それでは皆様、実技能力テストの会場に移動しましょう。———私共に皆様の実力の深奥をお見せください。」

　セレーナが言葉を切るとともに、彼女の深緑の瞳からの、全てを見透かすような鋭い視線が恍惚を帯び、私にすら異常な性的を誘発した。どうにかしてこの女性を自分のモノにしてしまいたいという異常な所有欲。彼女のそれ以降の全ての仕種、腕の回転や髪を払う動き、法衣の揺れ、全てが植え付けられた欲求とし、彼女の後に附いて歩き、一歩をテスト会場への白い床に刻む度、耐え難い闘争心が胸中に吹き上がる。

　これが。全てを見透かし、人心をいとも容易く操作する無敵の魔女の結社。当初、彼女らの無知を悟って生まれた精神的余裕は、今や見る影もなかった。

　テスト会場もまた白い窓のない空間だった。前の部屋との相違点は、壁を走る幾何学模様が幾分疎らになり、そして入り口から向かい側の壁にはペンローズタイリングのような模様が敷き詰められていたことだ。

　会場となった部屋の、白いスモークガラスの扉の隙間を通ると、急に空間に響く低音のエコーが耳朶を刺激し、漠然とした同調圧力が襲い掛かる。幾重にも重なったエコーがインプラントを通って解析され、周波数成分は個々の人声を成す。それはもしかすると、による二声歌唱の発展かもしれなかった。そうでなければ多人数で巧みに位相をずらして重ね合わせた、バラバラなようで統一された騒めき。

　その感情に押し流されてみると、恐らくこれに身を任せていれば、少なくとも外れた行動はしないで済むという安堵感が胸中に生まれないでもなかった

———しかし、の競争を潜り抜けてきたネットランナーの卵の常として、同調圧力や集団心理は遥か過去に葬り去っているのである。

　私は歩くスピードを緩めた。秘かに思案する。

　神経膠の指示に従うことに異論はなかった。恐らく私達を害する目的は「今のところ」無い。彼女らはいつでもそうすることができた。するとするならば、ここからだ

———実力を把握したら、役に立ちそうにないものは地獄に送られる。

転移者が一律に、認められて種馬生活に入れるほど実力があるというのなら、どうしてテストなんか実行するのだろうか?

　出来るだけ高い能力を持つものを選び出して父系祖先源にするため?それも一理あるが、それはそれとして一斉に集団で実行する意義がなさそうに思える。別に互いに力を振るう様子を見せる必要なんてないのだ。

　単純な不足に、あれほどの力を持った魔術師の集団が陥るとも考え辛かった。もし転移者が「贈物」であるという発言が正しいのであれば、何故それに、個別にテストを行うほどの時間もかけないのか?

　集団でテストを行うことのメリットを考える。資源削減の方面は、意味を恐らく為さない。では、集団で優劣を示すことで発生する何か———参加者の分裂、転移者間での差別化の理由付け、神経膠のような結社ならば、分割して統治しようとするのは当たり前の論理。では差別化の後に待つのは?

　種馬ならば積極的に劣等感を植え付けてどうするというのだろうか。劣等感を植え付けられた奴が種馬になることが、どのような影響を及ぼすか計り知れない。代替者が、それもより優れたものが居るということを意識しながら快楽に溺れるなどと、いつパラノイアになって依存の裏返しの凶行に及ぶかわからないではないか。

　そこまで考察して、私はそもそもあのぶれた輪郭の、神経膠の言い方によれば「外なる神」の情報を信頼していいものかわからないことに気付いた。神経膠は未だにその目的を完全には曝していない。そして、先ほどの問答で、彼女らは真の目的を一切曝すことなく、「外なる神」から私たちが何を聞かされたのか、誘導尋問と失言の誘発によって巧みに聞き出していたのだ。

　何が起きるか本気で分からなかった。疑心暗鬼どころではない、自分自身すら信じられないような、足元が揺らぐ感覚。

　そこに当然のように、例の同調圧力の声が滑り込んできた。最早抵抗する気が失せたので、それに従って他参加者の行列とともに移動。召喚時と同じ位置に着く。

　後ろからも、多種多様な靴が床を打つ音が続き、最後に乳白色のガラスドアが立てるドア枠との微かな摩擦音がして、テストの参加者が出揃った

———兎も角、もしかするならば、ここで命運が決まる。神経膠がどう私達を扱うにせよ、自分の能力はひけらかし過ぎることもなく、侮られる程度でもなく  
———彼女らが実力を侮る何て真似、するとは思えないが———このを潜り抜けなくては。

　私が心の準備を終えて数秒、目の前に出てきたのは先ほどとは異なる人物だった。毛先はピンクに近いマジェンタ、根本はターコイズに近いグリーン。左が長く、頤の近くまで延び、対照的に右側は剃り上げられた髪。パンクライクで、地球のメジャーヘアスタイルに近いそれは、正直言って目の前に出てきた彼女が纏っている白い法衣には全然似合わなかった。メイクアップも地球風。かなり化粧の薄いセレーナと異なり、濃色のアイラインが、下瞼を辿り、眦から少し先まで延びている。

　「・と申します。神経膠代表として、今回のを務めさせていただきます。以後お見知りおきを。」

　そう言って頭を下げる。ストリートキッドスタイルには全く似合わないコーポらしい一礼。そのミスマッチングには困惑と更なる恐れしか感じなかった。

　「では、皆様には簡単な操作から見せていただきましょう。

MPを認識するのは主に脳ですが、転移者の皆様の場合は、寧ろ筋肉から集中されてもらった方がよろしいかと。簡単に腕で実験していただきましょう。腕を出来る限り速く折り曲げてから伸ばしてみてください。ここで、転移前との感覚の違いに注目してみてください。」

　のダンベルを振っているみたいなシュールな絵面だ。私も軽く振ってみる。出来るだけ速く。繰り返す。

　周りからは、これに何の意味があるんです?という質問を投げかける声が伝わってくる。しかし、ここで神経膠に反抗しても意味はない。

　速く、速く。振動が肩を通り、頭にまで伝わってくる。が…いや違う、何かが違う、これは…

　「上出来です！MP操作は全てイメージから始まります———腕を振るイメージをするとき、頭や肩が振動することを想像されましたか？

　実際に振ってみた後ならまだしも、最初はそんなことを考え付かないでしょう。腕を振ってみて、頭や肩の振動を認識してようやくそれが効きだす———つまり、イメージ通りに身体を動かそうとすることによって、自然に魔力操作が及ぶのですよ。これがMP操作におけるもっとも本能的な段階、です。

　さらに能動的な放出の段階に至る前に、振動をイメージせずに体を動かしていただいて、イメージによる身体操作の精度を高めましょう！」

　アンがそう言った瞬間、奥にあったタイリングを施された壁が一挙に奥へと広がり、床の幾何学模様が6 x 3マスの正方格子へと変わる。およそ3m四方ほどになった格子の、自分たちに対応する位置に行くようにと、再び同調圧力が働いた。

　粛々と従う。周りもさっきのデモンストレーションで納得したのか、あるいは神経膠が見せ続ける魔術に恐れをなしているのか、悪態一つ吐かずに衝動に従って配置につく。

　行列のどこからでも見えるよう、床が一段高くなったグリッドの上に上ったアンが、身体を動かしながら口を開く。

　「では、私の動きを模倣してみてください。マスから出そうになってもご心配なく、その際は私達がサポートいたしますので。」

　そう彼女が言った瞬間、後方でガタっという音が響く。見遣ると、2000sのロックバンドのジャケットを着た、短髪の男がマスの境目の延長線上の、不可視の壁のようなものへ倒れこんでいた。

　「失礼、そのサポートっていうのがどのくらいか、確認してみたくてね。」

　馬鹿とも勇敢ともいえる突発的な行動に出た男の名前は恐らく、・だったはずだ。

　周りからの好奇、神経膠の出方に対する恐れと緊張が入り混じった視線を受けながら、何故か得意そうな顔で、アンの方を見上げている。

　アンは苦笑しながら、手を動かし、ナサニエルを直立姿勢へ戻した。

　「ええ、この通りにサポート致しますから、御心配なく。」

　「いいね、より頼もしい。プラチナプランなんて意味なかったなぁ、こんなのに巻き込まれるんだから。」

　ペラペラと、本気なのか微妙なトーンで地球の事情を洩らしていくナサニエル。何のつもりなのかと周囲から浴びせられる冷ややかな視線をものともせず、独特のにやけ面を浮かべながら続ける。

　「その動き、なんかさ、太極拳とジュード―の組み合わせみたいだよね？アジアっぽいな、そんなのどこから伝わったの？容貌からしてラティーナかなと思ったんだけど。」

　「ええと、地球における武道の造詣は申し訳ありませんが欠けていまして、これは私の…その、故郷の武術体系の一部になります。」

　「へぇ、じゃぁその型何て言うの？」

　「非常に基本的な動きですので、この型のみの名前はございません。他のいくつかとまとめて扱われておりまして、と…」

　「いいじゃん、それ、その動きで基礎の一部とか、発展形がどうなってるか気になる！見せてよ！」

　「望まれるのであれば後ほど…申し訳ありませんが、現在はテスト中でして、他の方に私の動きを辿っていただく必要が…」

　「あー、ごめんごめん、いや、綺麗な型だったからさ。カラテやってたんだけど、その低速で結構高度な身体操作繰り出してるし、何か特殊な種類なのかなーって。」

　「ええ、御褒めにあずかり光栄です。身体操作を高精度で行えるのはMP操作の賜物ですから、この武術事態によるものとは少々異なりますが…

　そうです、皆様にはこの動きを完全にイミテートする能力が存在するのですよ！」

　「うーん、じゃぁこんな感じ？」

　続く情報漏洩に冷や汗をかく私達を尻目に、まるでナンパでもしているみたいな応酬を続けていたナサニエルが、急に滑らかな動きで踊り出す。

　その動きはアジア古典舞踊とミュージカルの融合。拍と回転、跳躍、そしてこれ見よがしな低速のパートを含んだ複雑な動きを、脚を絡ませることも、拍に遅れることもなく巧みに踊っていく。おまけに周囲の障壁すら利用し、ブレイキンみたいなステップすら交えて周囲12mのグリッド内に完全な独壇場を完成させた。

　そして最後には全身をかなりの急角度に後傾させ、帽子を抑えるみたいに額に手をかざした怪奇なポーズで、高らかに

　「ポゥ！」

と叫んだ。その瞬間、身体から力が全て抜けたように床に倒れこむ…が、間断なく飛んできた魔術念動によって支えられ、直立姿勢に戻った。

　「か…完璧です！転移前にダンスか武術をお習いで？その動きは…の一派、アール・デコ派とモダニズムの融合！それでいてをも巧みに内包している！それにその身体操作精度…

　天賦の才だとでも言うのでしょうか？完璧すぎます、まさに！」

　から降り注ぐ無際限の賛辞。あれほど複雑なステップを踏みながら息一つ乱していないナサニエルは、それを当然の栄光といった風な表情で受け、さらに

　「いやぁ、前に見たAI生成の適当な動きのを真似してみただけさ。

まさか現実でできるなんて全く予想もしてなかったけど、これは最高だ。今なら世界最高のストリートパフォーマーに成れそうだよ！」

　「はい！興行の総収入は絶対にを超えます！最後の立ち姿も締めとして素晴らしい！あれは絶対にPerson of the Yearを飾れますよ！」

　「ははは、褒めるなって、照れちゃうじゃないか。」

　謎の熱い応酬を繰り広げるアンとナサニエル。何と言うか、ナード仲間の熱い語り合いにしか見えないそれに、場の雰囲気が緊迫とコメディがまじりあった、まるでジョークが盛大に滑った後みたいなものに変化する。

　そんな状況の収拾を付けようとしているのか、行列の後ろの全く予期していない位置から声が飛んできた。

　「AJ、興奮しすぎ。が進まない。さっさと模倣対象の型やって。」

　少女的なソプラノに冷たい声音。平静を取り戻させようと諫めているはずなのに、声質のせいで混沌とした状況をさらにエスカレートさせているその声の主は、音もなくアンの後ろに移動すると、アンの頭に小さな鉄拳を下した。

　「あうっ！もう、ナースチャ！出番まで引っ込んでてよ！私の出る幕ここだけなんだから！」

　「じゃあその幕を厳正に全うして。職務怠慢してエキサイトしてるようにしか見えない。」

　と呼ばれたその少女の見た目は、黒髪のサイドテールに低めの身長、童顔———正直13かそこらにしか見えない———、そしてアステリア並みに白い日光を透過させそうなくらいの肌と、コントラストの目立つ真っ黒な瞳が際立っていた。メイクアップは一切なかったにもかかわらず下瞼の色は濃くなっている。小麦っぽい、ラティーナくらいの濃い色の肌をしていて、健康的なアンとは対照的に、全体的に病的な印象を与える、儚げな美少女。そんな彼女が、相貌に合わせるような法衣をアレンジしたらしき白いワンピースを着て、アンの背後で宙に浮いている。

　「さっさとやる。やらなかったら行動抑制突っ込むから。」

　「わかったよ、やればいいんでしょ、やれば…過保護なんだから…」

　過保護?ナースチャの方が保護される方にしか見えないのであるが。どうやらナースチャはアンのか何からしい。アンが場を仕切り直しだすと、腕を組んだままスーッと平行移動して後ろへ下がって行った。

　「ええでは、この動きをイミテートしてください。繰り返しますから、最初1回通して見て、その後合わせて動いてみることをお勧めします。」

　気を取り直したが本調子でないのか、でアンが続ける。

　のあとしばらく固まっていた現場がようやく動き出した。

————————————————————————————————————

　アンやナサニエルは簡単そうに踊っていたが、実際その基礎型はかなり難しかった。私は上半身はほぼ完璧に模倣できるようになったが、下半身はそうも行かなかった。どうしても足がついている位置が、イメージよりズレてしまう。イメージした動きを強く意識しながら動かしても、重なるべきじゃないところで腿が重なり、脚が互いに入り組んで倒れ掛かる。

　そのたび念動で支えられながら、下半身の動きの模倣に挑戦してみる。IKを意識…足の着く位置から、腿、脛、全てが決定できるはず。

　何でこんなに真面目に努力しているのか自分でもわからなかったが、きっと同調圧力と、どうにかして価値を証明しなくてはという意識の合わせ技だったのだろう。頑張ると意外と上達するので、それが楽しかったのもある。

　短時間で結構上達してきたな、と考えていると、アンが声を張り上げ、

　「皆さんの実力は把握できました！ここでテストは終わりにします！次、MP放出訓練の前に、何か体調不良を感じている方はお申し出ください！」

　その言葉に反応して、何人か互いに顔を見合わせている。確かに、若干顔色が悪くなっていたり、全力疾走後のように完全に息が上がっていたりしていた。

　しかし、申し出て何かされるのが恐いのか、誰も名乗りを上げようとはしない。アンも気付いているらしいが、自発的に名乗り出るのを待っているのか腰に手を当てたまま体調の悪そうな数人の方に視線を巡らせながら待っていた。

　そのまま十数秒が経過したとき、急に念動が発動し、不調を示している者達が浮き上がる。

　「隠せもしないのに強がらないで。さっさとMP補給を受ける。、スティムを。」

　ナースチャだった。体調不良者は適当に念動でまとめられ、どうやら教母らしい、全身黒いヴェールで覆われた女性の前に投げ出される。

　ケーブルの束でも投げるみたいに適当に放り出された彼らを、教母は———本当に教母がやっているのか知らないが———丁寧に一人ひとり受け止め、足元に連れてきて寝かすと、有無を言わさず胸元にナルコティックの注射器みたいな、ちょっとしたSMGのような形状の機械を突き付けて何か液体を注射し、特に重症に見えるものの口元にはミームで見たことのあるドラッグののようなものを差し込んで何か吸わせていた。

　治療を受けた連中はすぐに癲癇発作みたいに震えだし、しばらく四肢に無制御の筋痙攣が走ったのち、頭を抑えて唸りながら立ち上がってきた。

　そいつらが復帰して、また同調圧力に飲まれてグリッドの定位置に着くと、今度はアンが下がってナースチャが前に進み出(勿論一切音のない空中浮遊)、両腕を振って空間を一気に拡張し、ついでに私達も移動させた。

　今や私達は18人で、測距アプリの言うところ7m間隔で一列に並び、遥か奥、120m先にあるの的のような目標に向き合っている。

　「簡単なシューティング。用いるのはレーザー、、何でもいい。当たりさえすれば構わない。まずは当てて。」

　そう言ってナースチャが左手を振り上げると、彼女と瓜二つの少女が、私達から見て的のある方に出現する。

　「わかると思うけど、これはホログラムのようなもの。射線に立ちたくないけど、いちいち頭をひねって頸椎骨折されたら嫌だから出してる。感謝して。」

　私達は自分の身体の限界もわからない能無しだとでも思われているのだろうか…?と思ったが、その瞬間、そういえば身体補助操作で首を限界を超えた速度で回したりできるのではないかと思い当たった。もしそれをやってしまったら…

　実際私達は、自分の身体の限界を知らない無能の集まりだ。少なくとも、今のところは。

　「MP操作の第一段階はやはりイメージ。筋肉を使って間接的に発動させることである程度感覚をつかんだと思うけど、それを更に拡張して身体外に出せないか考えること———今は発光を伴うとでも考えながらやるといい。そうすれば直ぐにできる。」

　言われて実践してみる。身体から離れたものの操作———ハッキングでも考えればいいのだろうか?暗示をかけてみることにした。

　私は現在ジャックイン中の。操作範囲は身体から得られる情報を拡張して、空間にアクセスして、相対パスでこの位…ここはローカルネット内…

　そう考えていると、微弱ながら身体を離れた何かを操作しているような感覚が付いてきた。ちょっとむず痒い、と思った瞬間にそれは引っ込んでしまう。何度か試して、ようやく成功して、MPを空間に大体固定できた。身体を起点にしている生化、まだ動かすとついてきてしまうが…

　周りを見回していると、驚いたことに皆私より上手くやっていた。既に全身から光り輝く靄のようなものを発散している者も居れば、さらに進んで炎のようなものを口から噴き出してみている者もいる。

　極めつけはここから5つ隣にいる男———名前は確か、・。純南インド系の見た目で、整えられた無精髭とでも呼ぶしかない髭を生やしている。

　彼は今、退屈したようにMPでジャグリングしていた…そのそれぞれのMPジャグリングボールも、一つはチェレンコフ放射みたいな眩い青白い光で、もう一つは炎の塊、最後は地球を模したような、紫の光点でできた惑星のホログラム。

　圧倒的なスキルの差…!

　ナサニエルの動きを見たときより強く実感できる、越えられない壁。それをしばらく見せつけていた彼は、詰まらなさそうにジャグリングを中断してボールを全て消すと、

　「おらっ！」

　ナースチャのホロの方へ向けてチェレンコフ放射レーザーを射出した！

　驚いた風もなく避けるナースチャ。しかし、次の瞬間、後ろから突風が吹いて、の方に本物のナースチャが移動していた。

　「やる気？じゃあここまで来て。」

　そう言いながら彼女は空間をより一層大胆に拡張する。高さ500mは行きそうなほどの、白い壁の連続。空間も8km四方ほどまで拡張され、その頂点へとナースチャが一瞬で移動する。ついでに、ひらひらしたワンピースから白いトレンチコートにグレーのスラックス、ブラックのロングブーツに着替えていた。肩から金のチェーンが伝っていて、まるで軍服みたいに見える。

　「もちろん！やってやるよ！」

　パヴィトラが躊躇なく飛び出す。ナースチャと違って目で終えたが、かなりの上昇速度。200m/sは軽く超えるくらいの速度で舞い上がったパヴィトラは、ものの1.5sでナースチャが居る高度450mまでスカイダイヴィング姿勢で到達した。

　「わざわざ腹ばいにならないと浮遊できないの？」

　さらに挑発するナースチャ。はっ、と溜息をついて口角を吊り上がらせたパヴィトラは、直立姿勢に戻りながら更に50m上昇。天井近くまで到達する。ナースチャの方は気を利かせたのか何なのか、更に空間をxyz全ての軸で拡張し、光度は最大3kmに達し、平面空間も100km²程度まで拡張された。ナースチャ自身も上昇。ほぼ微小なダニか米粒がいいところの大きさになり、1km程まで上昇する。

　それに伴いパヴィトラも上昇。高度有利を抑えたまま、目測高度2kmに陣取った。

　「じゃあ、来て。」

　オプティクスの最大倍率で確認できるナースチャの横顔が、可憐に歪んだ

———不機嫌か無表情しか見せてこなかった少女の顔が、花が咲き誇るように笑っている。どうやらバトルジャンキーらしい。

　あれほど遠くにいるのに、地上に不思議なほどすっきりと声が伝わってくる。そしてパヴィトラの声もそうだった。

　「お望み通り！」

　そのままダイヴするパヴィトラ。ナースチャの方は、背後に謎の魔方陣的な六芒星と3重の同心円を展開し、数重の屈折しながら展開するレーザーを射出して空対空砲火。回転し、螺旋を描く弾幕が、曲芸的に身体を捻ってナースチャへ迫るパヴィトラへ集中する。

　圧倒的な熱と光量にパヴィトラの顔が白く白熱し、収束した光に飲まれた彼は一瞬死んだかに見えた。しかし、その瞬間、収束してから拡散する光線の間を縫い、先ほど光に飲まれたはずのパヴィトラが出現。ナースチャの迎撃を避けながら更に降下する。

　インプラントによる動体視力向上が無ければ追いきれないほどの魔術の応酬の連続。不動のナースチャの光線を、急角度で吶喊するパヴィトラがバレルロールやナイフエッジを駆使して避け続け、遂にナースチャまで数十mという距離に迫る。

　「モノトーナスだな！もっと何かないのか、自分で言ってた、こういうのとかなぁ！」

　パヴィトラは急停止すると掌底から青炎を噴出。更に周囲をチェレンコフ放射が取り巻き、炎と共に拡散し、ナースチャの弾幕を全て飲み込んで行く。

　「回避以外もできたんだ、面白い…！じゃぁ、次ね。感謝して、私のこれを訓練段階で見れるんだから。」

　そう言った瞬間、世界が歪んだ。いや、認識が歪んだ。圧倒的圧力。爆風が迫ってくるみたいな気迫で、実際に風を感じるわけでもないのに、圧迫感を覚えてその場で数歩下がってしまう。

　それは最初、チェレンコフ放射に近いシアンの光点で構成されていた。時代遅れのの形状をしたそれは、しかし、徐々にシアンの光点の集合から色が付き、マテリアルな実体を帯びて完成されてみるとのような白とグレーの混交した模様のおかげで、最新鋭のに似た印象を与える。

　更にナースチャの周囲に光点が飛び交う。背中に集まった光点は、機械的な直線でできた翼のフォルムに整形しなおされ、ライフルと同じく実体を帯びると、翼開長3m近い、スレートとブラックのボディにディープブルーの線条が走る細長い翼状の物体となった。その周囲に白い円環が3対取りつき、やたらとゴテゴテとした装飾と化す。

　炎を噴出し続けるパヴィトラの目前で完成された、それらの装備を帯びた彼女は、ライフルをパヴィトラに向け、

　「これに対処出来たらドッグファイトしてあげる。精々頑張って。」

　と呟くと共に、銃口からどう見てもサイズの見合っていない巨大な光線を発射した。見ているだけでもオプティクスの感知部が焼けるような、圧倒的な光を放つ白熱したレーザーバースト。

　流石に不味いと悟ったのか、全力で回避に転じたパヴィトラをレーザーバレットが追尾する。トップスピードでハートループ、キューバンエイト、ときにはハンマーヘッドを繰り出して回避し続けるパヴィトラだが、流石に速度が不足していた

———白熱したバレットに今度こそ彼の姿が飲み込まれる。

　勝ち誇った顔でそれを見届けたナースチャは、今度はその黒々とした瞳を地上の私達に向け、

　「さーぁ、他の連中はどうか、見てみよっ！」

　と、背後の翼から18の光点を展開し、それを私達に向かって射出してきた！

　全く予想していなかった唐突な攻撃に、私達は慌てふためいて逃げだそうとした。グリッドは十二分すぎるほどに広い。空間を利用すれば回避できるはずだった。

　しかし勿論、あの少女がそこまで甘いわけもなく、当然のように弾は私達を追尾してきた。

　接近速度からして最早避けられない。爆発する場合どこまで影響が及ぶか微妙…ならば、受け止める他に無い。

　どうやって…?とにかく鍵はMP放出にあるはずだ。何しろこれはMP放出のテスト。既にナースチャが目的を忘れている可能性もあるが、それにしてももうこれ以外に生き残る手立てはない。

　迫るレーザーらしき光の塊を睨みつける。身体の周囲から展開…何か、そう電磁シールドのようなイメージで…!

　ギリギリで正六角形のシールドの展開が間に合った。光弾がシールドに当たって弾け、強い衝撃に身体が揺れ、吹き飛ばされる。床に墜落する直前、身体補助操作による受け身のイメージがすんでのところで間に合い、どうにか怪我なく着地できた。

　理不尽すぎる試練だ。急な光弾攻撃への対応で、脳も身体も疲労困憊である。

　床に転がって休んでいると、上空では有り得ないほど激しい空中戦が展開されていた。パヴィトラはどうやら死んでいなかったらしい

———下肢を両方失っているが、確かに一応生きていた。鬼の様な形相でナースチャを睨み、今度は背後から大量の光弾を展開し、ナースチャの弾幕に応戦しながら降下する。何時の間にか背中から生えていたで実弾の弾幕を巡らせ、翼からミサイルの様な兵器を射出しながら、瞬間移動の様な高速移動を繰り返してパヴィトラから逃れるナースチャ。

　圧倒的な攻撃に耐えきりながら、パヴィトラは徐々にナースチャに迫っていく。唐突な移動でそれまでの動線から彼女が外れようとも、人間が耐えられるとは思えないほどのGが掛かっているに違いない、シャープターンで弾けるように軌道を変更して彼女を追い続ける。双方の圧倒的な実力に舌を巻く他なかった。地球ではおくびにも出さなかったパヴィトラの才能…フライトシミュレーターとか得意だったんだろうか？

　過激なまでの応酬を繰り広げるうちに、しびれを切らしたパヴィトラが一気に加速して遂にナースチャに迫る。白目を剥き、スーサイドランを完結せんと迫る彼に、ナースチャは

　「うーん、期待以上！でも、未熟。」

　再び圧迫感が訪れる。私も流石にこの圧力の原因を悟った。PABの奔流…抑えきれないのか、私の体の中にある量など吹けば飛ぶ塵に思えるような、莫大な量のPABがナースチャから溢れ出て、白熱した気体分子みたいに私達に衝突しているのだ。

　ナースチャの右目が紫紺に輝く。アステリアの虹彩の色そのものの輝きからPABが噴出、組織化して右目を中心にした陣を描く。その模様には見覚えがあった———掲示板のコミュニティのナチスネタで良く持ち出されていたシンボル。ハインリヒ・ヒムラ―のオカルト趣味の象徴であるそれの名前は確か、。ヨーロッパの反体制ネオナチのシンボルにもなったそれの、暗い輝きがパヴィトラを迎え撃つ。

　「」

　セレーナが呟いていたことをヒントにするなら、ある種の魔術を発動するための、あるいは。それによって発動された魔術の効果は、単純かつ絶大だった。

　先ほどまでトップスピードで迫っていたパヴィトラが急停止する。ナースチャの右目から展開された魔術陣、そこから延びる真空放電の様な紫雷がパヴィトラの両腕に絡みつき、バチバチと音を立てて彼を固定しているらしい。

　白目を剥き、脇腹まで血に染まったパヴィトラが抵抗しようと上半身を捻るが、固定された腕は一切動かない。

　「墜ちて」

　絶対者の様な気迫でナースチャが告げるや、紫雷が爆ぜ、パヴィトラの両腕を吹き飛ばす。達磨状態となったパヴィトラは上空2kmから落下し続け、床の血だまりとなるかと思いきや、グリッドの障壁を無効化して駆けてきたセレーナによって減速され、受け止められた。

　教母ともに、テキパキと担架を展開しながらセレーナが上空へ叫ぶ。

　「いくら何でもやり過ぎです、ナースチャ！彼が死んだらどうするんです！」

　「死ぬことはない程度に手加減してる。テストとして問題はない。」

　「心的外傷がMP計算野に与える影響を軽んじすぎてすよ…貴方も個人的に経験があるはずでしょう！」

　そうセレーナが叫んだ瞬間、ナースチャが彼女の背後に転移してきて、

　「必要ない情報———喋り過ぎ。黙ってそいつ持って行って。見てわかると思うけど傷は焼いてあるから教母が出るまでもないでしょ。」

　ナースチャの言葉に、緊迫した空気が両者の間に漂うが、先にセレーナが折れ、溜息をついて、気絶しているらしいパヴィトラを乗せた担架を部屋の入口の方へ飛ばした。

　セレーナはそれを追って部屋から退出。ナースチャは仕切り直し、といった風で上空へ舞い上がると、

　「大体わかった。さっきの奴以外ゴミ。あの程度で吹き飛ばされるとか、身体補助操作もMP放出も、才能が無いにも程がある…はぁ、期待してたのが馬鹿みたい。」

　その後も散々悪態を吐いた後、ナースチャは何も連絡することなく、今度は何故か自分の足で歩いて、部屋から退出して行った。

　残されたのはアンと17人になった私達転移者。気まずそうにしながら突っ立っていたアンは、1分くらいしてようやく口を開き、

　「ええと、それでは、これでテストは終了になります。皆様、お疲れさまでしたー。宿泊施設に案内しますので、私に着いてきてください。」

　先ほどさんざっぱらアンにナンパを仕掛けていたナサニエルも黙りこくっている。何が何だかわからないが、魔術師がとんでもない火力を備えた連中であることはわかった。一人大量破壊兵器がいいとこみたいな連中らしい———この世界の体制がどうやって維持されているんだか、本気で不思議に感じてきた。

　「ナースチャ、もう！また転移者に悪戯仕掛けて、それじゃ私のとして全うできてないじゃん！私にああいってたくせに、職務怠慢じゃない！」

　そこはブラックマーケットにあるバー、とでも言うのが似合う場所だった。天井からケーブルが垂れ、いくつものスクリーンがバーテーブルの上、天井から下がる障壁を覆いつくしている。

　ほの暗いの光の下で、ナースチャとアン、そしてセレーナはバーカウンターに着いて、先程までのテストをリコールしていた。

　「AJのナードトークと私のファイトは別。私には実力を確かめる目的しかなかったし、への対処ではあれが最善。どのみち魔術スキルは見せざるを得ないんだから、私が『悪い警官』になるだけ。あれで他の連中も大体AJに懐いたでしょ？」

　「…まあ、確かに効果はありましたけどね。でも予想より信用されてません。やはりセレーナが最初に策士ムーヴをやり過ぎたのでは？」

　アンがセレーナに目を向ける。責めるような言葉とは裏腹に、若干の同情を秘めた瞳。

　「それでフアレスを疑うほどになると思ってなかったわよ。どうもそこらの一般人とは相当違うみたいね…ギャングでもない、コーポの、しかもあの歳で既に政争に慣れ切った連中。唐突なことが多すぎて戸惑っているようだけど、政治的なキレがある。」

　「ではどうします？揺さぶりをかけ続けますか？」

　「相手が政治的に対応できるなら、こちらもその方面で行くのが得策だと思うわ。いつまで揺さぶり続けられるかわからないし…危険な連中が多い。抱き込めるまでは、こちらの手札をこれ以上見せるのはやめにしておきたい。」

　「それではその方向で行きましょうか。

　現状有望株は5人。私と談義で盛り上がったナサニエル、ナースチャと戦ったパヴィトラ、あとは身体補助操作で特にキレがあった黄褐色の肌をした男と、薄い顔でモノアイゴーグルを嵌めていた女。最後に、セレーナに最初に質問された黒人。彼、何て言うんでしたっけ？」

　「パヴィトラによればダンカラン・ケイタ。あの放出速度は魅力的ね。操りやすそうなのも便利。」

　「あとの連中ではどうでしょう？」

　「緑モヒカンの男はどちらも良い感じに揃ってたわね。あとは赤髪の女かしら…MPの流れが特殊。ナースチャのハイドされたMP攻撃も見切ってたし、MP事態を感じ取る能力が高いみたい。」

　「空間認識系ですか、使えますね。後、彼女はどうでしょう、鳶色の長髪の子。」

　「確かクレアね…うーん、身体補助操作はまあまあだったけど、放出がてんで駄目ね。ナースチャの弾に耐えきれてなかった。」

　「それじゃぁAP行きですかぁ…磨けば光りそうだったんだけどなぁ…」

　「ナサニエルが居るじゃない、彼、貴方の事明らかに気に入ってるし、遊んでなさいよ。」

　「待って、セレーナ、まさかあいつから回収させる気？」

　どこからか煙草を取り出して青煙を燻らせていたナースチャが唐突に会話に介入する。

　「ええ、有望でしょう？回収価値はあるはずよ。」

　「そんなのだめ。絶対だめ。もう汚れ切ってるあんたとアンは違うの。権限使うから。」

　「はぁ、過保護ね…貴方達の関係は知ってるけど、主眼があるんだからそっちにも従ってよね。まぁ、今は良いわ、あのタイプは直ぐにくっつくと他に流れる。」

　「あと3年以上は絶対にかけて。奴を完全にアンの虜にするの。性的関係を持たなくたって操れる。」

　「私は構わないですよ」

　アンの唐突な宣言に場が凍る。否、ナースチャが凍る。煙草を再び口元に運ぶ手が止まり、信じられない、とでも言いたげな目つきでアンを睨み、それからわなわなと震えだし、

　「何でそんなに無駄にしたがるの…？大事なものなのに、どうしてあんな程度の、軽薄な中身のない男で捨てようとするの…？」

　「処女崇拝なんて不要でしょう？それに、彼、ただ軽薄なだけじゃない感じがするんですよ…神経膠に繋ぎとめておきたい。必要なに見えます。」

　ほとほと付き合ってられない、といった風にナースチャは頭を振り、再び黙って煙草の煙を燻らせ始めた。

　気まずい雰囲気を更に気まずくしたいのか、黙ってやり取りを見つめていたセレーナが暇を告げて部屋から出る。

　アンはそれを見ると大きく欠伸して腕を伸ばし、凝り固まった筋肉を解きほぐした。

　「はーぁ、、色ボケしてる…男なんて大概良いものでもないのに。」

　「よく知ってるような口振りで言える。どれだけ汚れた連中か見たこともない癖に」

　「ええ、まぁ、でもそんなの聞くだけで十分ですよ。貴方みたいに地獄を見たくはないんです。まあ、女も大概ですけどね。人類皆獣です。あー、さっさとメリディアル様出ないかなぁ…」

　「どうだか。メリディアルが出ても変わらないんじゃない？あんな連中から遺伝が来てる奴が人類支配なんて碌なことにならないでしょ」

　「突然変異とか、自己組織化遺伝といった言葉を御存知で？私はそれに賭けますよ。」

　「無駄よ無駄。聖女様で限界だと思う」

　「そういえば聖女様ですね…どうされたんでしょう？重度の意識混濁でいらっしゃって…

　何か兆候ありました？確かに今回の転移はやたら長くかかりましたけど。」

　「呼ぶ予定だったのは20人。でも来たのは18人。欠けた2人が原因かも

———もし転移と同時に異常性を発揮できるほど才能を持ってたんだとしたら、見過ごせない脅威になる。

　あと、事前に兆候とかはなかった。いつも通り、面倒くさそうだっただけ」

　「何が起きたんでしょうねぇ…外との交信術すら忘れられてしまうとは、これは向こう1年は召喚できないかも。」

　「忙しくなりそうね…何としても欠けた2人を特定したい。パヴィトラにはあの色ボケが聞くでしょ。正直嫌だけど、ナサニエルから聞き出せることは聞き出してきて。性的な方策は禁止で。」

　「はいはい、わかりましたよ。」

　「…ところで、まさか処女崇拝無用とか、本気で言ってた？私を過保護だと思ってる？」

　「うーん、ちょっと思わないでもなかったり…あっ、ちょ、やめ、言い過ぎましたから今はっ…！」

　「誰の被監督生か思い出させてあげるから。ほら、さっさとこっち来て」

　「いやーっ！この人、獣！獣！どれだけ澄ましてても皆獣なんだぁーっ！」

　階下にまで響き渡る悲鳴に、セレーナは大仰そうにため息を吐いた。

　「誰が色ボケよ、あんたらの方がそうじゃない…」

　彼女の脳裡を飛び交うのはアストラント派が追い込まれた不味い状況。転移計画は失敗に近い———誘引した転移者の有用性を示さなければ、聖女を犠牲にして危険地帯で転移を強行したとしてアストラントが圧倒的不利に立たされる。聖女の計画の瑕疵となり得る状況。

　頭が痛い。勿論、バーで騒ぐナースチャだってそうだろう。聖女のに狂いが生じることはこれまでなかったはずが、今や聖女は意識混濁、それに付随して残骸の道の「壁」が揺らいでいる。

　兎も角、今回のターゲットは一人———聖女の計画では転移者などは、面白ければ拾っておく程度のおまけに過ぎない。想像より高いスキルを見せる人間が多かったが、素直に広いものをしたと考えておこう———アストラント派の首魁、セレーナはそう結論付けた。

　政治操作と錯綜する情事が神経膠の日常。性的思考、政治思考、冷徹な遺伝計算が交わる魑魅魍魎の巣窟。この先にきっとが居るのだと信じて、彼女たちは進み続ける。

　『それで、どういうことを訊かれたって？』

　ダンカランがナサニエルに尋ねる。どうやってか四肢を再生させたパヴィトラと、先程アンとのナードトークから帰ってきたばかりのナサニエルを中心にして、私達転移者6人は、割り当てられた寝室への扉が並ぶ、宿泊施設の談話室に集まっていた。

　集まっているとは言っても、実際のところ面と向かって会話したりはしていない。それどころか、皆適当に座り込んで、談話室にあった書籍を読んだり、ぼーっとしたりする「振りを」している。

　実際にやっているのはP2Pでの通信。構築されたローカルネットには、今個々の寝室に居る他の12人も繋がっている。

　あのテストの後、私達は怪我人を除いて宿泊施設に案内された。怪我人5人は一旦医務室へ連れていかれ、ついさっき戻ってきた。

　5人の内訳は、ナサニエル、パヴィトラ、、、ダンカラン。彼らは治療を受けるついでに神経膠メンバーと会話するチャンスが存在したらしく、それぞれ貴重な情報を持ち帰ってきていた。

　『まず、やはりあの説明役が神経膠について言っていたことは大体正しいみたいだ。で、父系祖先は目途がついてないのは確かだけど、母系は既に聖女でかなり収束したと見做されてる。つまり、父系祖先に成れそうなやつはアステリアとヤることになるな。』

　そう語るのはナサニエル。アンとナードトークしながら色々聞いたところ、あっさり喋ってくれたらしい。さも当然かのように父系祖先のことまで触れてきたそうだから、こちらがかなりの情報を把握しているとみて、逆に開示する方向に出たのだろう。

　『で、連中は消えた2人の事も疑っている。アステリアとロイド———流石にアステリアの方は事情が把握できてないみたいだけど、ロイドの方は何か特別扱いされてどこかに飛ばされたのではないかと疑ってる。

　…で、ここからちょっとややこしい話になるんだけど、俺達のPAB操作の実力って、成績反映されてるよな？特にあのリーグの』

　そうなのだ。治療を受けた負傷者は軒並みリーグ戦の成績が高い連中。ナサニエルは5位以内常連、パヴィトラは大概3位で、ユキコとフリオは頻繁にベスト8入りしていた。例外はダンカランだが、彼は最近腕を上げて、最新のリーグでは4位だった。

　つまり、どうやらリーグの実力が高い連中が…否、何らかの原因でネットランニングスキルが高い連中が、高度なPAB操作能力を得ている。ならば、2位常連のロイドはどうなのか。

　『まーぁ、あいつが居たら多分、あいつこそ！ってなるよなぁ…』

　ロイドのネットランニングスキルは経験の裏打ちを受けた堅実なもので、天才肌なところがあったアステリアと比べると、どのくらいPAB操作能力を得られるか未知数なところがある。しかし、あの総合力が高い男が、高い能力を得られないのなら、私達が見てきたパターンは完全に崩れ去ることになるのは確実だ。

　そんな男が、召喚に応じずに、あるいは応じたが何処かわからない場所に飛ばされている。

　『それで俺たちの利用価値が完全に失われることはないと思うけど、もしかしたらロイド探しに利用されるかもしれんね。』

　ロイドの捜索。私達の、PLとしての利用価値は多少損なわれることになるかもしれない。できれば避けたい行動。それに———

　『アステリアとロイドの繋がり…これが明るみになると、面倒なことが起きる可能性がある。あの聖女が、アステリアによって存在を上書きされた、といったことになっていた場合、混濁が晴れればロイドを探し始めるのではないか？』

　そう言うのはパヴィトラ。永年3位を張らざるを得なかった人間として、アステリアとロイドの関係には執着を持っているようだった。

　『ロイドは…危険だ。奴の情報は隠しておいた方が良い。奴が神経膠に来てしまえば、何をしでかすかわからん。』

　『おいおい、嫉妬かよ無精髭。BSS決められたからってだらしないぜ。』

　そう突っ込むのはダンカラン。セレーナの質問にはかなり狼狽えていたが、本性はナサニエルより軽薄なヒップホップ好みのギャング―ン気質だ。

　『痴情の話じゃない。奴は…転移直前、カンザキに母親を潰されている。奴の性格を知っているだろ、やたら愛憎深く、衝動的。そのくせ計画的だ。真顔で効果的なテロ計画を練れるような奴なんだ、警戒をしていて損はない。それに神経膠は…こちらに政治的なやり取りを持ち掛けてきている。セレーナのレトリックを読み解けば、何としても2人の情報を引き出そうとしつつ、あちら側の目的を読ませないように細かく配慮し続けている。向こうが政治家連中ならば、こちらも政治をやるまでだ。コーポのゲームルールさ、身近だろ。

　認識を共有していないように見せかけるんだ。浮かび上がる人物像を歪ませてやれ。短絡的な奴で、聖女を傷つける可能性があると言うことにしてしまえば、PLとしては回避されるんじゃないのか。確信はないが、俺達の利用価値を考えるなら、ゲームを仕掛けても不都合はないはずだ。』

　パヴィトラの言わんとすることはわかる。素直に開示するか、ゲームを仕掛けてこちらの意図を読ませないようにするか。神経膠は今のところ友好的だ(何か攻撃的な幼女も居るが)。ここはゲームを仕掛けることに賭けようとしているのだろう。遅かれ早かれ、私達の一部は神経膠を裏切ろうとするだろうから、それを読まれる前にこちらから攻勢を仕掛け、目くらましするのだ。

　『それに、認識を共有していないとなれば、気休めだが他の連中にも利用価値が出る。ある程度は証拠のために保存されるのではないか？

　利用価値がないと思われたやつがどうなるか知らんが、脱走する転移者が多いことからして碌な任務じゃないだろう』

　そうすれば余裕が生まれる、と諭すパヴィトラ。しかし…

　『お前らはそれでいいかもしれないけどな、俺はそうも行かないんだよ。過激派か何かに、政治ゲームを仕掛けるような生意気な連中は粛清してくれる、と迫られたらどうする気だ』

　抗議した男の名は。リーグのレートは前回10位だった私から3位下。MP放出でも、身体補助操作でもあまり良いパフォーマンスは出せていなかった。

　『向こうがどんなカードを切れるかわからない上に、主導権が完全に向こうの掌中にある政治ゲームなんか俺は御免だね。大概、説明役が真実を言っているなんてそこのナサニエルが言っただけで信じられるわけないだろ。説明役は魔術について、実践的なことは何も言わなかったじゃねぇか』

　『それでアクションを取らずに全て開示しろと言うのか？』

　『向こうは全部掌握してるんだから、その方がマシだね。いつ助けが来るかなんてわからないんだ、それまで這いつくばってでも生き残りたい。神経膠の中で生きていけると考えているお前さんらにはわからん話だろうがな』

　成績上位者への敵意をむき出しにしだすアンドリュー。他の成績下位者も迎合し、『危険すぎる。リスクは取りたくない』とか、『種馬生活のために俺達を貶めようとしているのでは？』とか言って、外野から対立を煽り立てる。

　ローカルネットには険悪な雰囲気が漂い始めた。私の推測では、恐らくこれこそ神経膠の狙い———成績上位と下位の分断。これによって転移者が脱出を試みたときのダメージを最小限にしようとしているのだ。

　ましてや、クラスメートとはいえ、政争相手でもあった間柄ばかりだ。一度対立が起きると、日和見も加わって分断が広がるのは一瞬だった。

　———下らない。こんな事やったって、神経膠の意のままになっている事は皆承知しているだろうに、それを知りながら対立しているのだ。感情に引き摺られているのだろう。こんな状況になってまで———面倒くさい。

　ほとほと呆れ返った私は、談話室を出て寝室に入り、自分に割り当てられた寝台に転がった。ローカルネットは未だに議論の声で満たされている。

　寝るには邪魔にしかならないそれをカットアウトし、寝ていても稼働できる、睡眠監視アプリと周囲環境の確認アプリを立ち上げて、私は眠りについた。

　私は低血圧だ。起床してすぐ圧倒的な眠気が襲ってきて、大概3度寝くらいする。しかし今回はそんなことする気には全然ならなかった———そもそも寝台の上ですらないのである。

　寝惚けた眼を擦って、周りを見回すと、どうやら私はバイザーを装着して、ネットランニングチェアの上に座っているらしい。衣服もネットランニングスーツに換えられている。

　何が…?身動ぎしようとしたが、どうも縛り付けられたように動けない。よく見ると、身体はチェアに拘束されていた。

　ゾッとする。まさか、これは…旧ネットへのブリーチ?自分は利用価値のない側に回ったのか?それとも他も…?

　周囲を見てみれば、何か巨大な機械の周囲に、転移者たちが縛り付けられたランナーチェアが、いくつも機械を囲むように並べられている。まだ起きていないやつも居たが、起きたやつは軒並み困惑と怯えを目に浮かべながら状況を確認している。と、目の前の乳白色のガラスドアが開き、見たことのない女が入って来た。

　「おいッ！これはどういうことだ！何が、何が起きてるっ！」

　アンドリューの声だった。それで私は悟った。どうやら失格側に来てしまったらしい———ブリーチ任務が待っている。これまで36波に渡って転移者がそのために召喚され、多くの脱走者を出した、危険と思われる任務。

　アンドリューに咆えられた女は、右手を軽く振り、喚く彼を黙らせた。

　容貌は東アジア系。勿論すさまじく美しかった。髪を後ろにまとめ、長いポニーテールのようにしている。

　「DDPにジャックイン」

　女が口を開き、アルトが響くと同時に、ケーブルとコネクタがひとりでに動き、私達のDDPへ迫る。

　「や、やめろ！やめてくれ！何を、DDPに接続した先に何がある！」

　先ほど黙らされたアンドリューが再び口を開く。それを見た女はにんまりと口を歪め、そして———

　「喜べ、お前は囮だ。」

　そう告げると、アンドリューのDDPにだけ先んじてコネクタを接続した。抵抗虚しく、強引に接続されるアンドリュー。

　最初は何もなかった。バイザーに情報が流れだし、目を閉じたアンドリューは、マトリックスに接続しているときみたいに、たまに首を動かす程度の運動を始める。

　しかし、数秒が経つと、アンドリューの鼻から、目から、耳から、頭にある全ての孔から血が垂れ始めた。

　「食われ始めてるな。さて、そいつに意識が向いている間にカウンターメジャーをインストールしてやる」

　女がそういうと同時に、私達チェアのコネクタも動き出す。

　嫌だ…!食われる…?要するにあれは遠隔でハッキングを受けて、中枢神経を破壊されているんだっ!の噂。ローグAI。恐らくそれに類するものだ、ならば、旧ネット何て言うのは正真正銘のマトリックスの地獄で…

　「ジャックイン」

　為すすべもなくコネクタが接続された。

　私はDDPをオフラインにしようと格闘する。エラー。

　オフライン。エラー。オフライン。エラー。オフライン。エラー。

　何度やっても同じだった。DDPがオフラインにできない。一縷の望みをかけたオフライン操作の攻勢は、にべもなく跳ね除けられ、私は情報のインフローに飲まれた。

　見知った空間。テンソル。光点。マトリックスだ。しかし、郷愁のようなものはゼロ。私が知っているマトリックスより遥かに暗く、澱んでいて、そして…

　彼方から金属が擦れ合う様な音と、悲鳴に近い音が聞こえてくる。実際は共感覚なのだが、この悲鳴はおそらく…

　アンドリューだった。彼は今、紅い靄の様なものの下敷きにされ、それに侵入されようとしている。抵抗して四方八方に攻撃を仕掛けるアンドリューだが、為すすべなくその靄は彼に浸入していく。

　どうやらその靄は彼に集中ているようだった。私が観察していても、何も行動をとらない。

　とにかく、逃げなければ…!成績下位でも、施設内最優秀くらいの実力は持っているアンドリューが為すすべなくされるだけなんて、そんな悪夢、関わりたくない!

　とにかく逃げる。どこか安全な場所は?探し続ける。と、どこかから信号が届いた。

　『旧世界のデータの残骸に侵入しろ。データのノルマを達成し次第オフラインにする。』

　データ要塞へ侵入?残骸探査?不穏なことばかり、しかもあのローグAIが屯する地獄を潜り抜けて実行しなくてはならない。

　『見つかるな。一定ノルマを達成し続けろ。その限り生存を保証する。』

　無茶振りだ。こんな…こんな任務って…

　移動を戸惑っている私は、どうやら格好の的だったらしい。とにかくさっさと動いていればよかった…

　ローグAIが私に目を付け、侵入を始めた瞬間に考えたのはそれだった。

　が歪む。水平と垂直に走る紅の線条。重低音が突き刺さり、痛みが延髄から拡散。数千のナイフで神経系を刺し貫かれてるみたいな、鋭い痛みと、片頭痛みたいな鈍痛が同時に襲い来る。

　いやだ、いや、こんなことって、こんなことで消費されて終わる何て、嫌だ、私はっ

　ああ゛アaivaggggggあああああああああああああああghyviaaaaaAaaaaaaaaaaaaa

　醒めたときには夢だと思った。視界が真赤に染まっている———顔中生温かい液体に覆われている。洟、涙、そして目と鼻からの血、血、血。

　バイザーも出血に汚れていた。頭がガンガンする。長い偏頭痛の後みたいな、強くて鈍い痛みがまだ神経系を蝕んでいる。

　息を吸った。鉄の臭いしかしない。鼻の奥に血が吸い込まれてきて痛い。思わず咽た。あの後私はどうにかAIを跳ね除けた…と言うより、AIが「見逃してくれた」。私が使ったブラックICEを見たAIは、一旦様子見に移ったのだ。その隙を突いて逃げ、とにかく逃げ、そしてデータの残骸に隠れた。私を探すAIの探知を潜り抜けながらどうにか情報を手に入れた。2025年の、環境科学に関する研究論文。保全のための、農業の重要性と、「海洋農業」の可能性を説いた平凡な論文。それが私の入手した成果。

　それと同時にオフラインにされ、どうにか舞い戻ってきて、最初に感じたのは鉄の臭い。実感が薄いが、地獄から戻ってきたのだ。

　息が吸える…壊れた中枢神経系が酸素に快楽を求める。

　数分して、ようやく周りを観察するだけの余裕が出てきた。ダイヴ中だった他のランナーたちが次々に抜けてくる。出血まで行っているのは、視界内では私とアンドリューだけ。他は蒼白で、かなり怯えているが、一応無事のようだった。私達にダイヴを強いたのとは別の、青い髪の女がやってきて、過呼吸を起こしている奴に鎮静剤を投与した。

　しばらくすると先ほどのアジア系の女が、顔中から流血して、全く動かないアンドリューに近付くと、興奮剤がどうとか、と青髪の女に話し始めた。

　青髪は小さな声で今興奮剤を使うとこいつは死んでしまう、と伝える。それを聞いたアジア系は不機嫌そうな顔をして、脆弱な奴め、とだけ吐き捨てると部屋から出ていった。

　青髪はポリ手袋をつけるとアンドリューの前に屈み、口に指を突っ込んで舌を下げさせ、胸を小突いて血の塊を吐き出させた。そうするとアンドリューが息を吹き返し、蒼白な顔に虚ろな眼で青髪の女を見つめ始める。

　血と唾液で汚れたポリ手袋を外した女は、それをベルトに着けたエチケット袋のようなものに入れた。

　それから女は私の目の前に入り口をふさぐように陣取り、話し始めた。

　「It was like a hell and a nightmare combined, wasn’t it?」

　英語だ。英語だった。この世界の言語ではない、その言葉は流暢な英語だった。

　「ここは防音が施されているから安心して。防音術式も重ねて展開している。時間がないからさっさと伝えさせてもらう———「鷲」から伝言。計画がある。3日後、エージェントが派遣される。詳細は、ローカルネットが2600秒後に解放されるから、その時に繋いで入手して。パスワードをハンドサインで伝える。あと、これから見せるハンドサインは私達の間での暗号だから、見逃さないように。」

　英語で紡がれるその言葉に、ほとんど茫然自失としていたアンドリューも顔を上げる。

　目の前の女が右手を振ると、視界の両端にもう二人同じ女が現れた。ナースチャがやっていたのと同じ術式だろう。恐らくだが、私からちょうどこの機械を挟んで反対側にまで、女が出現しているはずだ。

　女がハンドサインを始める。それをアルファベットや数字と照合。直ぐにパターンに気付いた。何のことはない———ASCIIコード表を用いた暗号だ。

　施設「地下」。神経膠の閉鎖施設は実は中間の空隙に浮かぶ軌道コロニー内にある。しかし、この「地下」は、その軌道コロニー内空間と繋がってはいるが、地上の地下1200mにある旧世界のバンカーであった。

　この類の空間の歪みは旧世界のインフラでは日常茶飯の事だ。どのような災害が発生したのか、未だに全貌はつかめないが———少なくとも人類がほぼ滅亡するほどの規模だったのは確か。

　そんな「地下」の薄暗い部屋———元は何か、エレクトロニクスの研究室と思われる———に、神経膠「派」の、ダイヴァー管理担当者3人が集まっていた。

　中東系の容貌をした鳶色の髪の女、・が話し始める。

　「それで、今回は何人死んだ？」

　東アジア系の黒髪の女、・が答える。

　「初日だけど、0人。危ない奴は囮含めて2人。結構抵抗できてるし、やはり元はネットランナーだったというのは確かみたい。」

　「当たりを引いたわね、これなら後1年は耐えれそう。

　聖女様に起きたことは原因もわからないんでしょう？転移者の内の欠けた2人…

　そのどちらかが原因でないかとアストラントは睨んでるみたいだけど。」

　「転移者原因論ばかり繰り出す連中だけど、今回に限ってはそうとしか思えない。聖女様には全く不調はなかったし、今回で異常と言えば、転移にやたら時間がかかったことと転移者が2人欠けていたことが主。そして正常に召喚されてきた18人は、熟練したネットランナーではあるけど、魔術の実力は普通か若干高い程度。全て疑義は居なくなった2人に集中してる。」

　「その2人の捜索状況で、何も上がってきていないっていうのもおかしいものよね…もし転移できていて、見つかってないとなると可能性があるのは…」

　思考するまでもない。シェンリンの脳裡に浮かぶ、全世界でも数少ない神経膠の影響力が届かない場所、それは、

　「旧世界の遺産が集まる場所…に地下研究施設、そして軌道ステーション。いずれにせよローグAIの巣窟ね。」

　「そこに、もしかするとかなりの魔術の実力を持っているかもしれない転移者が2人。

　…最悪ね、ローグAIが急にそうするとも思えないけど、もしインターフェースが築かれてしまったとしたら…」

　これまで神経膠が取ってきたローグAIへのは全て、アストラルネットとエレクトロニックネットの間に、大規模侵入可能なインターフェースを築かないことに終始していた。

　その方針が破れてしまえば、残りの選択肢は…

　シェンリンが答える。

　「逆の連中だけの問題ではなくなる。私達の方もファイアーウォールを築かなくては。魔術師を何十、もしかすると何百も維持に要するみたいなものを…コストの悪夢ができてしまう。」

　「…それに、鷲が攻勢を仕掛けようとしてきている。「残骸」攻略部隊が来る。」

　「そうなる前にやることをやるだけね。でしょう？私達は…」

　「アルレドール派。転移者の中に祖先が居る可能性なんて認めない。転移者に邪魔が居るならば殺すだけ。連中には遺伝を保存する価値はない———アストラントより先に探して、残る2人も殲滅して見せる。への途の前に、如何なる障害の存在も許さない。」

　「それではシェーラ、プランは？」

　ドーラにシェーラと呼ばれた青髪の女性は感情の抜けた声で応じた。

　「3日後、が残骸3層へと動く———その時に脱出を試みる転移者全員をその場で殺害。アストラント派に転移計画の失敗を突き付け、残留する転移者も処刑する。」

　「そういうことね。疑わしきは罰せよ…情報を用いる者なら、可能性の芽であろうと摘んでおく。アストラント派は転移者の中に居るかもしれないPLを潰す可能性を恐れて実行できないでいる。しかし、私達はそんなありえない可能性なんて考慮しない。でしょう？」

　そうとも。ドーラの言葉に応じて・・は考える。そしてこの女、アストラルを持つだけのも、事後の混乱の中で姿を消すだろう。

　メリディアルのとは人類の代表団体である。転移者が加わろうとそれは変わらない。即ち、も、神経膠内部の対立構造でさえも、神経膠の中枢意志と教義の制御下にあるのである。例え聖女が倒れようとも、私達だけで制御して見せる。

　シェーラはの脳内図式を脳裡に瞬かせ、微笑んだ。